

R TURN chakai のロゴ  
藝える



東京藝術大学、学長新しくなっちゃったよ。

藝える 第11号

東京藝術大学

### 東京藝術大学広報誌『藝える』第11号

発行日 2022年11月8日	写真 富田里美(表紙、P1-2、9-26)
編集・発行 東京藝術大学『藝える』編集部	校閲 西村 knack 雅彦
編集長 藤崎圭一郎	編集 小林沙友里
アートディレクション 有山達也	事務局 東京藝術大学社会連携課
デザイン 山本祐衣(アリアマデザインストア) 中本ちはる(アリアマデザインストア)	印刷 シナノパブリッシングプレス



#### 🌀 編集部より

『藝える』編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8  
東京藝術大学内 『藝える』編集部  
Fax : 03-5685-7761  
E-mail : toiwase@ml.geidai.ac.jp



# 藝える



「藝える」は「」と読みます。今号は日比野克彦学長の特集です。学長は1980年代からスター的な存在でした。アートオブジェ、絵画、空間デザイン、舞台美術など幅広い活動を展開する日比野氏に、私はサッカーで言えばガンガン攻めるFWタイプというイメージを抱いていたのですが、実際に美術学部長になった日比野氏に接するとだいぶ印象が変わりました。慎重に流れを見きわめる指揮官タイプ。今年度の入学式をガラリと変えたように、いきなりガッと動いて風通しのよい流れをつくるのも得意ですが、それだけではありません。人の動きや時代の変化をじっくり見きわめて、周囲の潜在力を引き出して動いている。そんな新学長がいま、社会に開かれた芸術のあり方を探求し、本学に新しい流れをつくりだそうとしています。それがどんなものなのか。本誌の記事でお確かめください。

藤崎圭一郎／美術学部デザイン科教授・本誌編集長

目次

特集

01

## 学長・日比野克彦

02

アートの、藝大の、自分の役割

### 日比野克彦の働き方

10

サッカー日本代表元監督  
岡田武史と語る

### 社会を動かす マネジメント

20

美術と音楽の間に垣根はいらない

### 今こそ アートは社会のために

28

キーワードで読み解く  
5分でわかる  
日比野克彦

30

### 授業SANKAN

白衣と制服と私

大学院美術研究科 保存科学研究室  
+ 音楽学部附属音楽高等学校

38

お知らせ



# 学長・日比野克彦

## 「特集」

今年4月に藝大の第11代学長に就任した日比野克彦。アーティストとして、教育者として芸術と社会を結びつけるべく活動してきた彼は、どんな背景をもち、藝大をどうしていこうと考えているのか。さまざまな角度から、日比野学長像に迫ります。

芸術は人を愛する。  
人はSOCCERを愛する。  
SOCCERは芸術を愛する。  
HIBINO  
2022.6.29





アートの、藝大の、自分の役割

# 働き方 日比野克彦の

学長交代から数カ月。  
ダンボールが積み、様変わりした学長室を訪れたのは、  
「働き方研究家」の西村佳哲。  
共にアートプロジェクトに関わってきた立場からの視点も交え、  
日比野克彦新学長へのインタビューを行った。



## 日比野克彦

ひびの・かつひこ / 1958年岐阜県生まれ。  
84年東京藝術大学大学院修了。デザイン科  
在学中にダンボールを使った作品で注目を浴  
び、国内外で幅広く活動。95年から藝大で  
教鞭をとり、今年学長に就任。岐阜県美術館  
館長、熊本市現代美術館館長、日本サッカー  
協会社会貢献委員会委員長も務める。

## 西村佳哲

にしむら・よしあき / 1964年東京都生まれ。  
働き方研究家。つくる・書く・教えるの3つ  
の領域で働く。約8年暮らした徳島県神山町  
では「まちを将来世代につなぐプロジェクト」  
に携わり、今年帰京。著書に『自分の仕事をつくる』(ちくま文庫)、『一緒に冒険をする』(弘文堂)などがある。



東京都美術館と藝大の連携事業「とびらプロジェクト」の仕事で、ここ10年ほど、年に何度か日比野さんと会うようになった。

いつも思うのは、彼がいるミーティングや語らいの場で、物事がよく動くことだ。みんなの言葉が生まれやすくなる。議論は停滞しにくく、展開可能な余地を前後左右に探しつつける感覚がつづく。これはおそらく彼自身の持ち前の働きで、本人の作品制作でも、近年のアートプロジェクトの現場でも、同じく作動しているんだろう。

日比野さんのアート制作は、どのようにアートプロジェクトへ移ってきたのか。その先で藝大の学長になったいま、どんなことを思っているのか聞いてみた。

——「完成してから見てほしい」「制作中の様子はむしろ見られたくない」人もいると思うけれど、日比野さんはそうでない。

日比野 見てもらっていたほうが不思議な力が出てくるし、一人でつくっていると「こーこーいちばん面白いのにもったいないな」「誰もいないな」って思う(笑)。

「どうつくったんだろう？」と思わせる超絶技巧的な作品も、世の中にはありますよね。でも自分は「こうつくったんだな」って見てわかるモノのほうが好きだし、そもそもダンボールを拾ってきて、早いと数時間後くらいには作品になるわけですよ。

——数時間後。

日比野 数週間と言いたいところだけど数時間(笑)。で、見た多くの人が「俺にもできそう」「やってみたいな」って思うはず。紙切って貼ってみたいなものだから。そういう意味では一次産業の生産者っぽいっていうか、海に潜って魚を突いたり、種播いて野菜育てたりみたいなの。

——手の込んだ加工品をつくるわけじゃなくて。

日比野 「パティシエになりたい」とあまり思わない(笑)。かといって、人と関わりたくてアートプロジェクトを始めるようになったわけじゃない。最初はやっぱりモノをつくるのが好きで、そこから始まっているんだけど……ギャラリーで展示したときになんか違和感があったんだよね。居場所がないっていうか。基本的にギャラリーに作家の場所はないですよ。作品が主役だから。自分の個展会場って、あまり居心地よくないよね(笑)。

でも「アトリエ」は自分がいなきや成立しない。アートの魅力っていうのは僕の場合、完成した作品そのものじゃなくて、「どうしようかな」「なんかいいかもしれない」「あ、でも駄目だ」とか手を動かしながらそれが生まれてくる過程にあるので、そこを伝えるには、やっぱりつくっているところを共有したくなる。アトリエに人を招き入れたり、逆に人がいるところへ行って一緒につくっている発想に、まあなっていた。

アートは「心が動く」こと

——それが公開制作のスタイルになっていき、



「TURN」のような福祉施設との試みにもつながっている。活動を重ねるなかで、日比野さん自身の「アート」の理解に変化はありましたか？

**日比野** 「アート」は彫刻や工芸や絵画作品だって九割九分の人が思っているだろうけど、モノでなく、関係「なんじゃないか」ということは随分前から思っていた。モノは否定はしないけど、モノだけじゃない。それができていくプロセスにこそ魅力があるって伝えたい気持ちには、ずっとあつたよね。

で、「アートプロジェクト」はモノでなく、出来事だ。自分の活動の中心が、どんどんどんどんそちのほうに動いて、費やす時間も増えていった。並行してアーティスト・イン・レジデンスの取り組みが増えたり、2000年から『大地の芸術祭』も始まって、そうした機会に呼んでもらいながらまあモノはつくるけど、アートは作品っていうモノではないなと思っていた。

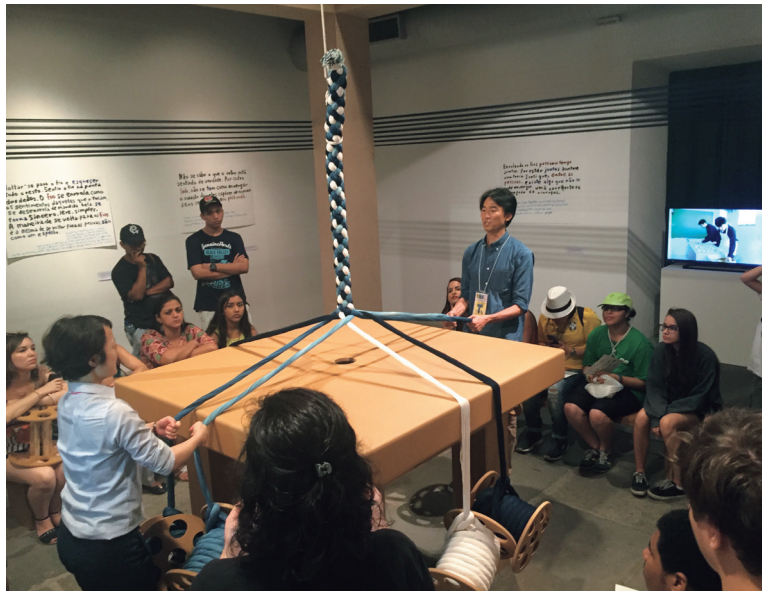
——ではない。  
**日比野** アートは、それを介した人と人の交流のなかにある、と思うようになった。だっ

て人がいなくなったらアートは存在しない。見た人の心が「わっ、いいね！」と動いた瞬間に、それが成立しているわけです。絵は物理的に言えば白い紙に絵の具がくっついてるだけのことで、それを見て「うわっ」と思うのは見る人の側の力だよね。

アーティストはその力を引き出すモノをつくる。「なんだこれ!？」とか、一緒に違う時間に行くとか、「なんかわかんないけどモヤモヤする」って心が動くスイッチを押す係で、人の心が動くことが「アート」だと思う。

——「心が動く」についてももう少し聞かせてください。

**日比野** じゃあ「心が動かない」ってどんなときなのかって、そっちを話してみると、東日本大震災のあと福島の避難所で「ハートマークビューイング」という活動をしていたん



「TURN」は障害の有無、世代、性、国籍などの違いを超えた多様な人々の出会いを促すことで、表現を生み出すプロジェクト。写真は2016年、日比野研出身のアーティスト・五十嵐靖晃がブラジルの自閉症児療育施設で大きな江戸組紐の作品を共同制作した際の様子。

です。集まった人たちとボロ切れをハサミで切って、ハートの形をつくり、パッチワークみたく大きな布にチクチク縫ってバナナや幕にしていく活動をみんなでやっていたのね。で、あれはゴールデンウィークの頃だった





「ハートマークビューイング」は、被災者が暮らす生活空間を心温まる空間にしたい、という人々の想いをかたちにするプロジェクト。東日本大震災や熊本地震の被災地をはじめ、全国各地でハートをモチーフにしたパッチワークが制作され、届けられている。

かな。震災からひと月くらい経った頃、少しお年を召した女性がここに来て、気がつくと一緒に作業していた。その彼女が「なんか久しぶりにモノをつくった」って。「こういうことができるように、やっとなれた」と言っ

ていて。

この先は僕の想像になるけど、親族も、あるいは家も失ったかもしれない。過去を振り返りたくないし、未来のことも考えられない。もう本当に心が動いていない。時間が止まっ

てるというか、今が今しかない

い、1秒が1秒でしかないっていう、針の止まったような時間を毎日過ごしている。彼女の言葉の向こうにそんな辛さのようなものを想像したんです。そんなことのあった方が、「ちょっとやってみようかな」とハートマークをつくって。色を選んだり、手を動かしたりしながら、出来上がりを少し想像する。みんなで作る大きなものに加わってみる。

このとき「モノをつくる意

味は、少し先のことを想像する力にあるんじゃないか」と思ったんですね。なにかがい

ちばん辛いかって、やっぱり時間が止まってしまおうというか、生きていることを実感できないことなんじゃないか。その経験の後から「時間を動かす」とか「想いを馳せる」とか「振り返る」とか「心が動く」といった言葉を、よく口にするようになったと思う。

### 一緒に動いていく時間が増えて

——社会課題にアートの関わるようになったきっかけは、そもそもなんだったんでしょう？

**日比野** それね。小学校1年生のときを思い返すんだけど。みんなバス通学で、夏の日放課後、バス停で待っていると暑い。すると友達が「前にあるビルの中が涼しい」と気づくわけ。で、中に入って、今度は冷たいお茶が出る装置を見つける。小学1年生が、クローラーの効いた部屋で、紙コップで冷茶を飲みながらバスを待つって、行き先のバスが来ると「じゃね」と帰っていた時期があった。

ある日担任の先生が「小学校前の銀行から電話がありました」と（笑）。「みなさん銀行はどんなところか知っていますか？」「うー





「明後日朝顔プロジェクト」は、朝顔の育成を通して、人と人、人と地域、地域と地域のコミュニケーションを促す試み。2003年に新潟の『大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ』を機にスタートし、いまや全国に広がっている。

するようになったきっかけは？」と考えたとき、「あ。『銀行のお茶』かー」と思い出したんだよね。社会的な出来事を、表現にして、みんなで協働してそれを見てもらうって、あのときにやったんだなあって思い返した。

阪神・淡路大震災があった。アーティストの島袋道浩がそのとき神戸にいて、「日比野さん。喫茶店出すから看板つくりに来てくれる？」と連絡があつて笑)。なじみの喫茶店があつた場所が焼け野原になつて、でもその店のお母さんと「コーヒー出そう」って、インスタントコーヒーを出し始めていて。僕もリュックに絵の具と白い布を詰めて行つた。電車はまだ通つていなかったから、大阪の港から大林組の船に乗つてもらつて。

看板を描きながら「色つてきれいだなー」と思つたよね。あたりはまつ茶つ茶で。赤と緑で「カーナ」つてお店の名前を描いたら、すごい目立って。「うわっ。色つて元気出るね」みたいな話をした。

つづけて地下鉄サリン事件があつて。高学歴の人々がカルト集団に入つてああいう事件を起こして。そんなふうには20世紀が終わつていく。21世紀は明るい未来かと思つていただけ、あれ？ ちよつと常識がおかしくなつてきているなと。95年の6月にヴェネチア・ビエンナーレと呼ばれて、いつも通りダンボー

ん。涼しくて、お茶が飲めるところかな」みたいな笑)。

で、いまにしてみたらその先生がすごかつたなと思うけど、彼はそれを脚本にして、「銀行のお茶」つていうお芝居をつくつてみんなで演じたんです。文化祭で上演して銀行の人も見に来て、最後に拍手してくれて。なんかこう本当に良かったなーみたいなの。

——すべて回収された感じ(笑)。

日比野 そうそう(笑)。「社会的課題を意識

新潟県十日町で「明後日朝顔プロジェクト」が始まつたのは2003年で、その少し前の1999年からは茨城県と「HIBINO HOSPITAL」つていうワークショップを始めていて、どちらもいまもつづいているけど、さらに遡ると、僕は80年代は西武百貨店やバルコなどのセゾングループとかまあその辺の仕事をガンガンやっていたわけですが。でも90年に入ってからバブルが弾けて、企業の文化的な活動が縮小して。その後、95年に



ルを使って、阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件をテーマにした絵を描いて持っていった。

そんななかで「アートの役割」について考えたながら、同じ年の10月から藝大の教員になったんだよね。当時呼んでくれたデザイン科の先生たちに「あまり大学の中で教えるつもりはない。これまでの活動をつづけていいの？」と聞いたたら、「それでいい」「どっどん大学の外に出ていって」と言ってくれたので、学生たちを連れ出して、いろんなワークショップやプロジェクトを始めていった。

「TURN」や「DOOR」を含め、社会的な課題に関わるアートプロジェクトを動かすようになっていった背景にはそんな流れがあります。

——「アートで社会的課題を解決する」と聞くと、違和感を持つ人もいるかも。

**日比野** 「意味がないからアートなんだ」とか「そんな安っぽいもんじゃない」「なぜ経済の僕になるんだ」みたいなことを言う人もいますよね。

でも、アートの魅力や役割を限定しなくていいんじゃないか、と思うんです。もっと

いろんな力があると思うし、「社会的な課題を解決する」という切り口から見えてくるアートの働きも、きつとある。

### アート、藝大、自分の役割

**日比野** 学長になって、いま、東京藝術大学に関連する団体・企業・自治体、あるいは「自分たちは藝大と関係ない」と思っていた方々にも、それぞれが持っている課題について「アートでなんかできるの？」と聞かれたとして、「できますよ！」って宣言しているわけです。もうすべてのものに有効だと(笑)。

そうなるべきだと思うんです。たとえばいま高校2〜3年生の親戚の子が「藝大を受けたい」と言い出したとき、周囲には「大変だぞー。就職できるかどうかかわかんないし。応援はするけど……」って感じの反応が多いんじゃないかな。なかには「レッスン頑張ってる

親戚みんなで応援するね！」みたいな家庭もあるかもしれないけど、たいていは「芸術か……」という反応で、それが世の中の認識でもあるんじゃないか。でもそうじゃなくって。「素晴らしい！」(パ



「HIBINO HOSPITAL」はもともと日比野美術研究室付属病院放送部としてホームページ上で「アートによる診療」をしたり、参加者がアーティストとともに自己治療のため作品を制作、展示したりしていた。現在は誰もが参加できるワークショップを実施している。



チパチパチ」社会にも役立つし、未来をつくることだし、絶対にいい選択だから、お父さんもお母さんもみんな応援する！」って反応が返ってくるような藝大にしていきたい。——社会のなかでより機能するようにしたい。

**日比野** それが藝大の責任だと思うんだよ。21世紀になって20年経って、物質文明もだいぶ変わってきた。地球全体のことを100年、1000年先まで考えるようになり、小学生でもそういうことがわかるようになってきた時代のなかで、芸術が果たせる役割はもう潮目が変わってくると思うんだよ。

このときに藝大が、教育して研究して人材を育てて、「アートがあることが社会の基盤なんだ」という状況をつくっていかなくたら誰がやるんですか、みたいな話じゃない？で、それが自分の役目だと思ってこの仕事を引き受けている。それぞれの役割がありますよね。アーティストでいえば、たとえば村上隆さんには村上隆さんの、草間彌生さんには草間彌生さんの役割がある。じゃあ「日比野克彦の役割はなに？」と聞かれたら、やつ

ぱりより多くの人にアートの魅力を、アートの役割を伝えること、それを開拓していくことだと思う。藝大としてもそれをやっていこうということで、自分を選んでいただいていると思っている。

「完成した作品がアート」という認識はいまだに根強いけど、アートには、プロセスを共有する力であるとか、魅力的な使える特性がいくつもある。たとえば「一人ひとりの違いを受け容れる多様性のある社会の実現」にしてもアートを使えばやりやすいし、多様性のある地域づくりや場づくりを、もっと形にしやすくなるんじゃないかな。

アートの役割をいろんなところにどんどん盛り込ませていきたい。僕は美術館の館長の仕事もしているけど、熊本市現代美術館では最近市役所に御用聞きに行ってるんです。「困



「DOOR (Diversity on the Arts Project)」は藝大として開講した、社会人が藝大生と一緒に学ぶ履修証明制度(文部科学省推奨)。「アート×福祉」をテーマに「多様な人々が共生できる社会」を支える人材を育成。さまざまな講師を迎えユニークなカリキュラムを展開中。

ったことありませんか」「いまなにが課題ですか？」って。少子化とか、看板がどうといった苦情とか、市役所には社会課題が山積みになっていて、「美術館とそれに取り組



んでみませんか？」という働きかけを始めて  
いる。

岐阜県美術館では、最初の一年目は館長の  
机と椅子をロビーに持ち出しました。来館し

た人たちに、「自分が館長だったらこんな美  
術館にしたいと思ったことを書いてね」みた  
いにして。

藝大では、まず美術学部長に就任したとき



に教授会の席の並び方を変えた。最近では学長  
懇談会の呼び名も「ラウンドテーブル」に変  
えた。入学式のパフォーマンスも、音楽と美  
術が一緒になってメッセージを出していく形  
にして。YouTubeでの情報発信も始めてい  
るけど、とにかくスタートダッシュの半年く  
らいをまずはしっかりやらないと。6年間の  
任期なんてもうあつという間に終わっちゃう  
はずだから。

——具体的に。

**日比野** うん。わかりやすく示していかない  
と。学長って基本的にわかりにくいじゃない  
ですか。「なにやってんの？」みたいな(笑)。  
関わっている学生もいなくなるから。「藝大  
がなんか変わってきたね」「面白くなってきた  
」いろいろなところで藝大の話が出てきたね  
といった言葉がよく聞かれるような状況を、  
同じようなビジョンを持つてる人たちと6年  
間、精いっぱいいつくつていきたいよね。

注\*2人の接点である「とびらプロジェクト」は、東京  
都美術館と藝大が2012年にスタートした、美術館  
を拠点にアートを介してコミュニティを育むソーシャル  
デザインプロジェクト。



FC今治の練習グラウンドを背景に。日比野学長は、FC今治のアドバイザーも務めている。



## 岡田武史

株式会社今治 夢スポーツ代表取締役会長。  
1956年大阪府生まれ。早稲田大学政治経済学部を卒業後、古河電気工業サッカー部に入団。引退後は、日本代表監督(2度W杯出場)、コンサドーレ札幌監督、横浜F・マリノス監督、中国スーパーリーグの杭州绿城足球監督を歴任。AFC最優秀監督、Jリーグ最優秀監督など受賞歴多数。今年7月に本学の経営協議会委員に就任した。





サッカー日本代表元監督  
岡田武史と語る

# 社会を動かす マネジメント

サッカー日本代表の元監督で、現在はJ3のFC今治のオーナーである岡田武史さん。日比野学長とは30年来の仲で、学ぶべき経営センスをもった先達でもあります。今回は来年完成を予定している愛媛県今治の里山スタジアムの建設現場を訪れ、社会におけるアートとスポーツの可能性について語られています。



### 30年来の2人の関係

**日比野** 岡田さんとは、僕が1993-94年にNHK・BSのサッカー番組『Jリーグダイジェスト』で司会をしていた時にゲスト出演していただいて以来の関係ですね。岡田さんは当時何をされてたんでしたっけ？

**岡田** ジェフ(現ジェフユナイテッド市原・千葉)のコーチじゃないかな。当時はまだ日比野さんのことを詳しく知らなくて、ダンボールで有名なすごい人だと聞いていました。

**日比野** 2004年頃には、藝大の先端(先端芸術表現科)で授業をしてもらいましたよね。最初は教室で講義をして、その後グラウンドで学生と一緒に変わったルールのサッカーをしたと思います。パスを出した相手の名前を呼んで、ボールを受けた人は次の人の名前を呼んで、またパスを出す。その前にタッチされたら、相手ボールになるというゲームをやりましたよね。

**岡田** ある学生が「日比野先生」と呼んでパスを出すと、ボールを受けた日比野さんは誰

の名前も呼ばずにずっと逃げていたよね。理由を聞いたら、学生の名前がわからなくてパスを出せずにいたと(笑)。

**日比野** 新しく入った学生だったから名前がわからなかった(笑)。あと、講義のなかで、「スポーツ」という言葉の由来は「港を離れる」を意味する「ディスポート」、という説がある」と話してくれましたよね。

**岡田** 港のなかはルールが決まっているけど、ディスポートして大海原に出たらどこへ行くのも自分で判断しなさいという話だよ。人間は本来主体的なものなのに、日本人はそこが出しきれないから。

**日比野** 本当に素晴らしい授業でした。岡田さんの話は、サッカーを知っている人はもちろん、そうでない人が聞いてもわかりやすくて面白い。みんなが共感できるような話し方をしてくれるので、すごく勉強になります。そういうえば、その頃から会うたびに「学長をやれ」と言っていましたよね。

**岡田** 外から見ると、藝大はどちらかというところエリートが集まるお堅いイメージなので、

日比野さんのような人が学長をやったら藝大がひっくり返るだろうなと思っていた。リーダーに大事なものは、弱さも含めて素の自分<sup>+</sup>をさらけ出せるかどうか。日比野さんにはそれができるんじゃないかな。

#### 岡田さんが今治でやるうとしていること

**日比野** 里山スタジアムの建設現場を実際に見てみて、FC今治や岡田さんが描く大きな夢が現実になっていく様子がリアルに感じられました。何かがつくられるプロセスの持つワクワク感は、その時じゃないと感じられないですね。

**岡田** このスタジアムを使ったどんな取り組みができるか、いろいろ計画しているところですね。障害者の通所施設をつくって一緒にカフェを運営したり、ブドウ畑でワインをつくったり、フードバンクやリサイクルに関連した取り組みの中継所もつくる予定で。試合のない日はVIPルームが空いているから、学童保育や音楽教室として活用したり、一年を通してスタジアムに人が集まるような拠点





2023年に完成予定の「里山スタジアム」。この日はメインスタンドの建設作業が行われていた。

にしたいと思っています。

### 芸術やスポーツを通じて社会を変える

岡田 僕らは社会を変えようという企業理念をもとに、モノの豊かさより心の豊かさを大

切にする社会づくりを目指しているんです。資本主義社会だから仕方ないけど、日本にも経済格差はある。それを改善するために、ベールシックインカムや富裕層に税金をかけることが必要だと言われるけど、現状それを実行

するのはなかなか難しい。だから、FC今治ではファンクラブに入ると、メンバー内でお互いに衣食住を保障し合う仕組み「ベールシックインフラ」を検討しています。

日比野 ベールシックインフラ。

岡田 例えば「食」だと、FC今治が持っている畑、農業法人、フードバンクや各家庭で余っている食材を集めて、スタジアムに設置したオープンキッチンで街のレストランのシェフが月に1回ボランティアで料理をつくらなければならない。提供する。「住」に関しては、今治には空き家がたくさんあるので、大工のようなノウハウがある人と一緒にみんなで修復して住めるようにしたり。あとは、コミュニティ内で使える仮想通貨も考えています。そういった新しいコミュニティをつくり、全国にあるJリーグやBリーグなどのスポーツクラブがその中心を担っていけば、この国は変わるかもしれない。政治で社会を変えるのは難しいけど、民間の力で変えられるかもしれない。そのためには、スポーツや芸術、そしてそのなかにいるファンやコミュニティが必要だと思うんですね。







海と山が近くにある自然に恵まれた環境にあり、このスタジアムからどんなものが生まれるのか、期待が膨らむ。





## 人々を惹きつけるマネジメント

**日比野** 経営者としてやっていく上で、周りの人を惹きつける秘訣はありますか？

**岡田** まずは夢を語らないとダメ。そして、それだけではホラ吹きになってしまうから、リスクを冒してチャレンジする。今治に投資してくれ、とただ言ったところで誰も動かないから、ストーリーが大事だよ。例えば、AIが発達すると、AIが自分のことを自分より理解する時が来ると思う。結婚相手をどっちにするかという相談にも的確に答えてくれたりね。そうなると、ナビに従って車を運転するように、AIの言う通りに生きるようになる。失敗のない人生で、これはこれだけ悪いことではないけど、人間の幸せはそれだけじゃない。失敗しても再チャレンジして成長し、困難を乗り越えて、誰かと助け合うことで絆ができる。そうした幸せも必要だと思う。スポーツや文化には、それを提供する力がある。僕たちはこのスタジアムを、みんなの心の拠り所として365日、人が集まれ

る場所にしようとしています。なんて話すと、みんな共感してくれる。

**日比野** 岡田さんは昔からそういう性格だね。早稲田大学に入った時も体育会の推薦枠ではなく、同好会から体育会に入り、日本代表に選ばれた。いつも岡田さんには逆風があつて、そこを乗り越えている。代表監督の後は中国でクラブチームの監督をして、その次は今治!?みたいな。

**岡田** 同じことをやっても面白くないし、新しいチャレンジやワクワクすることがしたいよね。あと、最初は面白そうだと思つて動いたけど、やっぱり大変だからやめようかなという状況になつても、その時にはもう後ろに人がついて来ている。今治もそのパターンだね。でも、その人たちがいなければこうやつて続けてこれなかったかもしれない。

### 「目に見えない資本」の価値

**岡田** 日比野さんは芸術のエリートである一方で、社会ともうまく融合できる人。藝大自体もそうなつていくために、日比野さんが学

長になつたんだと思います。それは、僕が今治でやろうとしていることにもマッチしている。芸術やスポーツが社会に役立つ時代が来たんだよね。みんなが、自分の共感するものや応援したいものに時間やお金を使いたいと思いはじめている。これは、僕がよく言う「目に見えない資本」の話で、アートやスポーツの価値や感動は数字で表せないけど、そういったものの価値にみんなが気づき始めているということ。実際、この里山スタジアムを建てるために40億円の資金を調達できた。最初は「コロナで苦しい時に誰もお金を出せないから遅らせたほうがいい」と言われたけど、「これからの時代は里山スタジアムのようなものがあつて必要なんです」と語っていたら、若い経営者たちが手を挙げてくれた。

**日比野** コロナがなかったらできなかったということ？

**岡田** コロナ禍の悶々とした状況のなかで、このままでいいんだろうかとみんな考え始めたと思う。僕らの世代は、企業の使命は物質的な豊かさを国民に与えることだと言われて



藝術は人を愛する。  
人はSOCCERを愛する。  
SOCCERは藝術を  
愛する。  
HIRINO  
2022.10.29

岡田さんからのリクエストで選手入場口の壁に描かれた、日比野学長ならではのメッセージ。





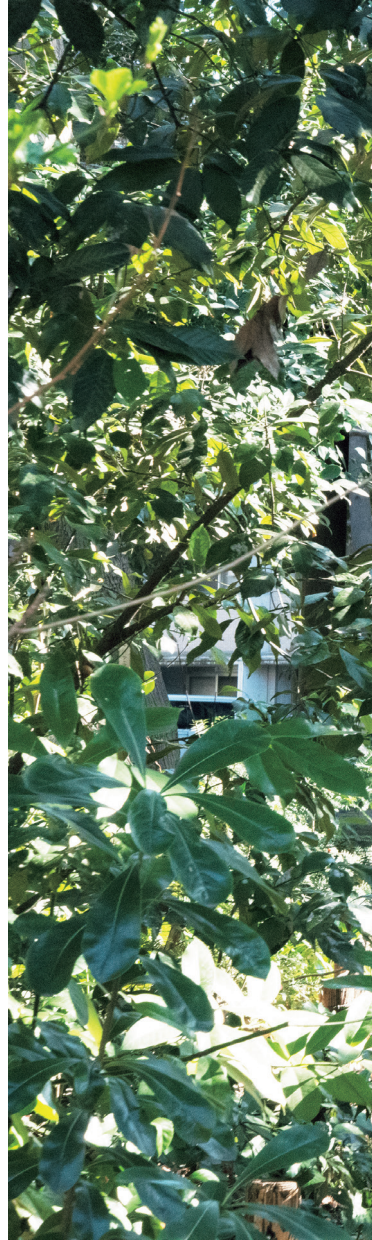
先端芸術表現科の授業で藝大の取手校地は訪れていたが、上野校地は初めての岡田さん。日比野学長が岡倉天心像など案内。

いた。でも、今の若い世代は生まれた時からモノはある。そうすると、モノじゃない価値に敏感になる。その辺りは、これから劇的に変わっていく気がするね。

**日比野** 絵の価値は、誰に伝わって、それによってどのような効果があったかというところにあって、創作活動をする人にとってはモノができて完成ということではない。モノを通して、鑑賞者や視聴者が行動変容を起したり、考え方を変えたりすることで、初めて作品を生み出したといえます。良いものが出てきて終わりではなく、社会貢献や課題解決につながることをイメージした上でプロデュースしていくことが大事なんですよね。

**岡田** 里山スタジアムに、誰もが何かをつくれる場を用意できないかと思っています。今考えているのはスタイルパン(ドラム缶でつくられた打楽器)。スタジアムに来たみんなが自由に叩くことができる、駅ピアノのようなイメージです。





**日比野** 芸術の世界でエリートというと、上手に弾ける、正確に描けるといった卓越した能力があるということを真つ先に思い浮かべますよね。それは否定しないけど、それだけではないということも藝大のもう一つの大きな柱としていきたい。僕がよく言う特性とは、10人が同じリングを描いても同じ絵にはならないということ。そこでお互い認め合い、絵とはそういうものだよね、と言えるのが芸術の特性だと思います。絵の場合、それぞれの絵の面白さがあって、例えば、母親から見たら息子の描いた絵が一番大事だと感じるのも特性。こういった多様性を認め合う考え方が芸術にはあります。美術館にあるような絵だけでなく、そうではない絵にも魅力がある。

**岡田** それを見ることで、どれだけ心が豊かになれるかが大事だよ。

### これからの学校のかたち

**岡田** 僕が代表を務める「今治・夢スポーツ」では、中学、高校、短大の運営も計画しています。ある学校法人が少子化で行き詰まってきたなかで僕に依頼があり、面白い学校にしようとするらしい先生たちが集まってきています。そこでは普通の授業をしたくないと思っています。これから予測のつかない新しい社会で多様性を受け入れられる人間をつくる教育をしていきたいと思っています。ひよっとすると、彼・彼女たちは芸術や文化に触れたことがないかもしれないけど、今日は絵を描いてみよう、木を削って何かつくってみよう、好きなスポーツをやろうとか、学校へ行くのが楽しくなり、みんなの目が輝くような場所にできないかと考えています。そこを藝大の

付属学校にするのもいいね。

**日比野** フランスには、パリのエコール・デ・ボザール(国立高等美術学校)をはじめ、約90もの芸術系大学があります。それに比べて、日本は圧倒的に芸術系の学校が少ない。藝大でやっていることを、地域の良さを活かしながらいろんな場所で展開していきたいですね。

**岡田** 地元で芸術の学校があれば、小さい時から興味をもつ人がいるだろうね。

**日比野** 現状の学校教育だと、同じクラスには同じ世代の人しかいないですよ。そのクラス全体を導いていこうとすると、総合的な教え方になる。みんなで同じレベルを目指すにはこの方法がいいけれど、一人一人の違いを確認し合う、個性をつくっていくとなると、そこには、いろいろな世代、多様な背景をもつ人がいたほうがいい。

**岡田** 3学年統一で、ある時間はみんなで一緒にやるとか。

**日比野** 地域のおじさんたちも参加するとか。

**岡田** いいね。そのアイデアいただき。

**日比野** 一応FC今治のアドバイザーだからね(笑)。



——夏の名残が残る上野校地、奏樂堂前に集った音楽学部の教員陣と日比野克彦学長。思い起こせば今年4月、ここで行われた令和4年度入学式での打楽器演奏とのコラボレーションによるライブ・パフォーマンスは、日比野学長の初仕事でもあった。

**藤原** 曲は日比野さんが選ばれたんですか？

**日比野** 入学式での演奏の担当は音楽学部で輪番制になっていて、今年は打楽器研究室の藤本(隆文)先生から「この曲を演奏します」と。

通常は演奏後に学長のスピーチが続くんですが、曲を聴いてアイデアが浮かんだので、「何か一緒にやりませんか？」と僕のほうから申し出て、あの形になりました。僕は美術学部のことほだいたいわかっているつもりなんです。音楽学部のなかでふだんどんな授業が行われているか、まだまだ知らないことがあります。学長になってからピアノのレッスンを見学したり、

美術と音楽の間に垣根はいらぬ

# 今こそ アートは 社会のために

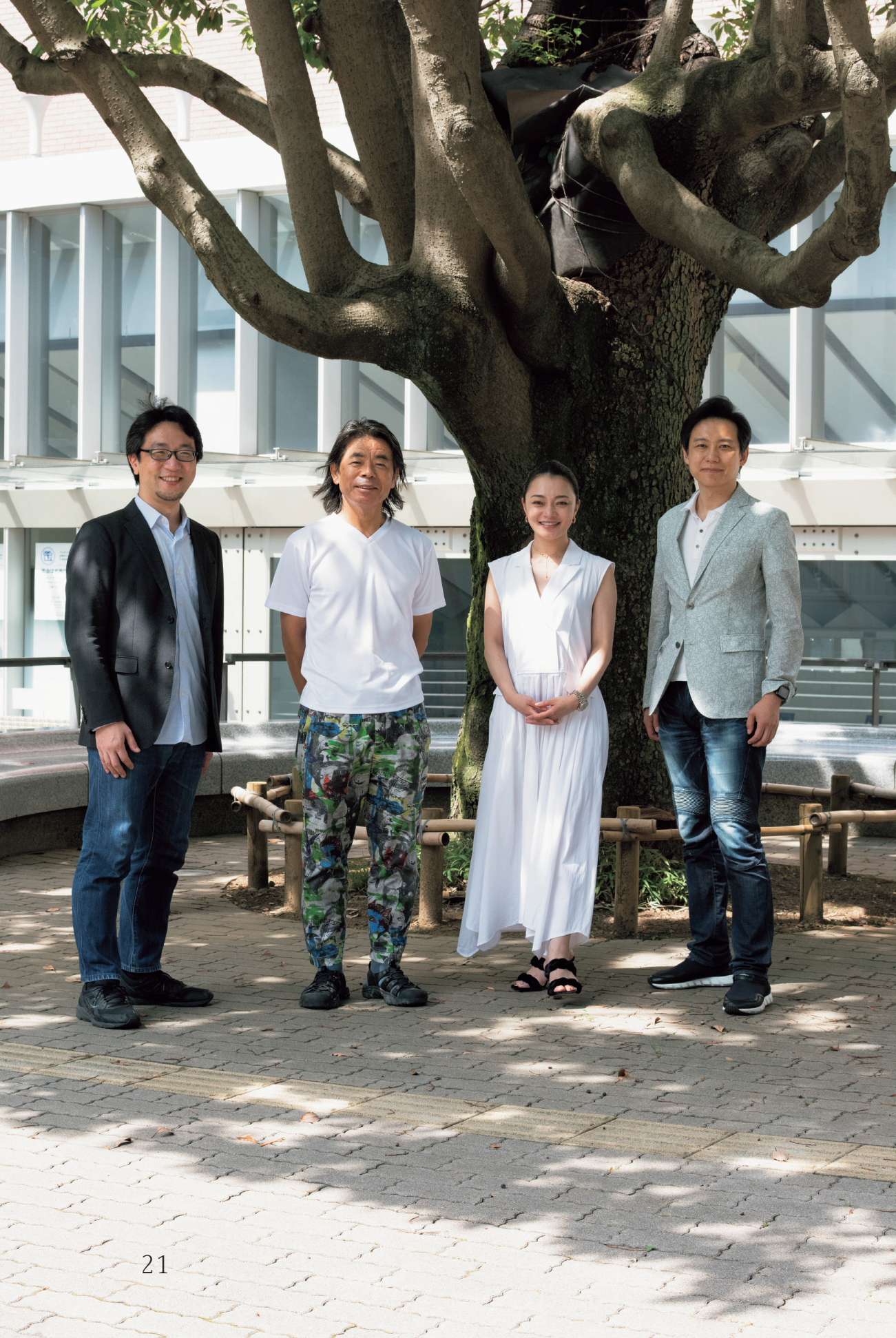
建学以来、東京藝術大学の二大柱として  
多くの芸術家を育ててきた美術学部と音楽学部。  
コロナ禍を経て迎える新時代、目指すべき方向とは？  
学長と音楽学部気鋭の教員陣が、未来像を展望します。

音楽学部の校舎にある能舞台を訪ねたりと、はじめて入る教室がたくさんありました。  
**高木** そうなんです。私は藝高(音楽学部附属音楽高等学校)から藝大で学び、大学院に入った年に演奏活動を始めました。大学院を出た年からはまず私立大学の非常勤で、その2年後から藝大で教えています。教えることは、自分では最初はあまり得意ではないと思

っていましたが、これまで無意識に行ってきた演奏を学生に教えることを通して言語化でき、結果的に自分にとっても演奏への意識を高めることにつながっていると感じています。  
**藤原** 僕は大学からですが、入学年の同期尺八専攻は私を含めて3人。当時はそれでも多いと言われていました。現在は学部・大学院合わせて6人です。大学には他の音楽を知りたくて入ったようなところがあって、西洋音楽をはじめいろいろな授業を履修して、そこで友だちを増やして、4年生のときには藝大でオーケストラと一緒にコンチェルト(協奏曲)をやったりしました。そんなふうに、ずっと邦楽の外に目がいついていた感じですね。ただ、美術学部との接点だけはほとんどなくて、今からすれば藝祭の神輿制作みこしのときに、もっともつと仲よくしておけばよかったなあと思っています。

**丸井** 僕はコンピューター理工学の出身で、2006年から音楽環境創造科で音響心理学を教えています。音と心理を結びつける研究はけっこう古くから行われていますが、研究室では音を聴いて人がどんなことを感じる







のか、それをどう明らかにするかという研究の手法だけを教え、テーマは学生の関心に任せて僕はサポートに回るといふやり方になっています。学生の興味の方向によつては、逆に僕のほうがものすごく勉強をしなくてはならないので、この16年間で本当にいろんなものを学生に教えてもらったと感謝しています。

### アートとは何か？を問い直す

**日比野** それぞれ特色がありますね。ここ5年ほどは、美術学部、音楽学部双方の学生が学部をまたいで授業を履修できるようにするなどの取り組みは続けてきましたが、その他の交流というと、やっぱり藝祭やサークル活動になるのかな。僕はサッカー部だったんですが、マネージャーがピアノの人でした。

**高木** へえーっ。でも確かに、藝祭のときがいちばん身近に感じてはいましたね。あとは、何回か美術館の中で演奏会があったり。

**藤原** つい最近も『和楽の美2022』（7月30日開催）という演奏会があり、邦楽科がメインではありましたが、大学院映像研究科や洋楽とのコラボレーションも行われました。

**丸井** 音楽環境創造科では、専門科目の一部として美術学部開設科目の履修が可能とされています。これは科が創設されたときからで、音楽、美術とジャンルを限定せず広く芸術を捉えてほしいという狙いによるものです。

**日比野** そうですね。世の中には美術館や音楽ホールがたくさんあって、それぞれアートの発表の場として機能しているけれども、区分けがはっきりしているぶん、逆に不自由な部分もあると思っっているんです。芸術とは、根本的な部分で「人の心を揺さぶるもの」であることは同じ。美術も音楽も、個人のなかでの自己探求にとどまらず、芸術が広く社会や人の生き方に対して影響力を発揮できる方法も考えていかなければなりません。専門性に囚われず、絶対値としてのアートの根本的な力を個々のアーティストが自分の表現を通して問いかけていく土壌をつくるのが、アートの研究機関である藝大のメッセージにもなっていく……学長はそのための旗振り役だと思っっています。

**高木** 学長は地域との連携によるアート活動にも携わっておられますが、音楽の分野で地

域との関わりというのと、やはり演奏技術の伝達ではないかと思えます。教員や学生たちが中高生や一般の方々と一緒に演奏する取り組みなどもすでに行われていますが、ただ指導するだけでなく、やはり「アートとは何か」ということを、音楽でないものも含めて伝えられる方法があるのではないかと、話を伺っていて感じました。

**日比野** そうですね。技術を伝えるなかで同時にその意味、意図を伝えることにより、その技術が真に身についていくのでしょね。

他者に教えるということは、自身が表現している感覚的なことを理論的に言語化し分析しなくてはならないので、自身のためにもなりますよね。それは美術も同じかと思えます。

**藤原** 奏楽堂や美術館ができたときに感じたのは、コンセプトを同じくする企画と一緒にできないかな？ということでした。たとえば、ある時代の美術の展示があったとき、同時代の音楽の演奏会が行われるとか。そういうわかりやすいコラボレーションから、音楽と美術の垣根をなくしていけたらと。

**日比野** 絵の具を使うのが美術で、楽器を演



音楽学部邦楽科尺八専攻 准教授

## 藤原道山

ふじわら・どうざん / 人間国宝・初代山本邦山に師事。都山流大師範。演奏家、作曲家として分野横断的な活動を行う。2020年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。





音楽学部器楽科管打楽専攻フルート 准教授

## 高木綾子

たかぎ・あやこ／8歳からフルートを始め、国内外のコンクールで受賞、数々のオーケストラと共演を果たす。2020年にデビュー20周年記念リサイタルを開催。





奏するのが音楽、というのは表現する道具の  
違いでの分け方とも言えて、パソコンでは絵  
も音もつくれる。だとすると、美術と音楽の  
垣根はすでないという視点もあるわけです  
よね。そうになると、美術館で美術品を、音楽  
ホールで音楽をということではなく、もつと違  
う感覚の表現も……もちろん、美術館やホー  
ルにはそれぞれの管理のルールはありますが、  
その時代にそこを使う人間次第で中身が変わ  
ってくることも、十分あり得ると思います。

### 「進化しない学問」の豊かさ

——この日は、高木先生がドビュッシー作曲  
の『シランクス』を、藤原先生が自身の作曲  
した『空』の抜粋版を、それぞれ演奏。表現  
者としての息遣いをそのままに感じられる音  
色に包まれ、さらに話は深まっていく。

**日比野** 藝大の教員は、それぞれが表現者で  
ありクリエーターであり、研究者であり。僕  
自身も、学長になるまでは自分の研究室を持  
っていました。教える側ではありますが、で  
も表現者としては同じ立場で、ひとりひとり  
にその人でなくては持ち得ない感性がある。

学生と教員の間は20、30年の年の違いなんて、  
そもそも関係ないのかもしれないし。よくノ  
ーベル賞のニュースなんかで「先生の研究を  
引き継いで自分の代でやつと成果が」という  
コメントがありますが、藝大での教育、研究  
はやり方が少し異なるんだと思います。

**丸井** 私が身を置いていた理系の学部がまさ  
にそうで、教授が研究テーマを持っていて、  
それを准教授や講師が手伝い、さらに助手が  
手伝って……というピラミッド構造でした。

ですから、藝大に着任したときは、「あ、こ  
こはぜんぜん雰囲気が違うぞ」と。それぞれ  
が自分でテーマを探しながら動いているので、  
自主性が高いなと感じましたね。

**日比野** ええ。たとえば、ヴァイオリンの教  
授が退任した後はまた別のヴァイオリンの先  
生が入りますが、その人も前任者とは違った  
自分なりの音色の研究をしている。そんなふ  
うに芸術は、研究が縦に積み上がっていかな  
いものなのかもしれません。縦に受け継がれ  
るのではなく、皆が並列というか。美術でい  
えば、2万年前に描かれた洞窟壁画を今見て  
も、同じように感動できますよね。日進月歩

の医学や天文学だとそういうわけにはいきま  
せんが、芸術というのは進歩という意味での  
進化をしない学問であって、そこがすばらし  
いところでもあるんじゃないかと。

**藤原** 尺八の演奏も、明治時代くらいのもの  
が蠟管(蓄音機用のシリンドラー型再生装置)で、  
その後はSP盤(蓄音機用レコード)で残っ  
ていますが、すばらしい演奏は今聴いても感  
動しますね。そうした音を自分の体に通して、  
次の世代に何を伝えていくか。伝統芸能の修  
業の場で言われてきたのは、「個性というの  
は出すものではなく出るもの、だからあえて  
発揮する必要はない」ということでした。そ  
れに、伝統として何かを受け取るにも、自分  
が受け取れるものかどうかでも受け取れない  
ものがあるし、逆にどこか別のところで拾っ  
てきたものもある。そうしたものを取捨選択  
しながら、結果、後世に伝わっていくものが  
個性なのかな、という気はしています。

**丸井** 僕はアーティストやクリエーターでは  
ないですが、芸術に携わっている方々が、個  
性を含めてもつとよい表現をするための土台  
になる何かをつくりたいとずっと考えてきま



音楽学部音楽環境創造科 教授

## 丸井淳史

まるい・あつし / ペンシルベニア州立大学、福島県立会津大学大学院ほかで学ぶ。大学院音楽研究科音楽文化学専攻音楽音響創造研究分野でも指導を行う。





した。音楽環境創造科はそういう人たちが集まっているところですので、録音にしても、音響心理学という分野にしても、どうやって芸術を外に発信していくか、芸術と社会の関わりについての考え方は、これからますます理解を深めていかなくてはと思っています。

### 孤独な人の心に届く力として

**日比野** 少し話を大きくすると、現在の「21世紀の今でも戦争が起こるのか」とか「これだけ医学が発達しても、感染症で出かけられなくなるんだ」という状況を見るにつけ、何でも人間の思い通りにできる世の中だと思っていたら、ぜんぜんそうではないし、もしかしたら地球や人間に対して現代人は大きな間違いを犯しているのかもしれない……と思ったりするんです。そういう尺度でものごとを考えたとき、やっぱり人の心に接するのがアートの仕事なんだろうな、と。いろいろな困難や災害に遭って、人が孤独のなかに引きこもってしまうとき、その心に届くものこそがアートで、我々がやっていることはこれからもっともっと社会にとって必要なものにな

っていくんだと、やはり伝えていきたい。

**高木** そうですね。本来なら音楽も美術も、生で人の目に触れ、人の耳に届いてほしいところですが、そのコミュニケーションが絶たれてしまったここ数年、学生たちにとっても心が荒む場面があったかと思います。それでも、人に音を届けたいという気持ちをオンラインで発散するなど、新しいスキルを身につけることができたという点では、いい経験でもあったのかなと……まあ、こんなことは人生で何度も体験したくはないですけど(笑)。  
**藤原** やっぱり、寂しいんですね。オンラインでレッスンをしていると、どんどん息が弱くなって、皆、音がちっちゃくなっていったりして。コロナ禍があったからこそ、生の大切さということは、もっともっと伝えていかなきゃなというふうには感じました。

**丸井** この間、技術も確かに進歩はしたんですが、やはりスピーカーから出る音に2時間集中するのは難しいし、液晶画面を通して本物の色を表現することはできない。「やっぱり実物を見に、聴きに行かなくちゃ」という呼び水効果はあったとは思いますが……。

**日比野** 社会的に大きな課題が生まれたとき、人間の考え方が変わって、その上で新しい芸術が生まれてくるというのは歴史的にもある話ですよ。藝大でいえば、2020年にコロナで大学に入れなかった時期に「東京藝大デジタルツイン」というバーチャルな藝大キャンパスが現れたことでこれまでになかったアート活動を始める契機になって、こともひとつの可能性だと思えます。その可能性をさらに拡げる意味でも、ジャンルや表現の手法にこだわらず、「アートとは何か」に立ちかえて考え、実践していくことですよ。

**一同** (うなづく)

**日比野** そして、藝大というと「ああ、トップアーティストを育成してるんですよ。私たちには関係ない世界だけ」と見られてしまうパターンもある。それは間違いではないし否定もしないけれども、それによって本来のアートの力が見えにくくなっているかもしれないのは問題です。ですのでいま一度、教育研究機関として藝大がその状況の改善に取り組んでいかなくてはとも思っているところです。どうぞご協力、よろしくお願いします。





右：和紙と竹でつくった巨大な行灯を鵜飼観覧船に載せ長良川に流す「こよみのよぶね」は2006年、日比野の発案で始まった。今年の開催日は日比野の朋友であるバスキアの誕生日と重なる。左：幼少期の家族写真。一緒に写っているのは母と妹。



らう。自分の筆跡が父方の叔父と母方の祖母のそれと似ていることについて「私を妙に安心させる事実である」と語った日比野の言葉にも、岐阜のDNAが感じられる。

## 岐阜

は、日比野克彦の郷里。ここで彼の絶対色感や基礎嗅覚は形成されたと思う。長良川や金華山の情景は、いまや岐阜市の冬の風物詩となった「こよみのよぶね」に表現されている。毎年、冬至の夜に開催される叙情アートは日比野の心の原点ともいえるだろう。

父は誰からも親しまれる頼り甲斐のある人物だった。センスあふれる母は息子に美術に対する好奇心を与えた。幼少期には色とりどりの積み木のおもちゃ、小学時に大病で入院した時にはベッドに世界名画全集があったという。日比野の原点は、岐阜で過ごした日常の積み重ねのなかにあるのだ

## キーワードで読み解く

# 5分でわかる 日比野克彦

文＝後藤栄司

ごとう・えいじ／岐阜新聞社東京支社特別顧問。80年代後半、岐阜新聞社入社3年目で東京支社に赴任。日比野作品の圧倒的な力とその空間づくりから魅了され、手書き新聞「HIBINO EARTH PAPER」の制作を依頼。以来、日比野学長とは30年を超える付き合い。

1980年代から、多岐にわたる分野で活躍してきた日比野学長。その活動を30年以上見続けてきた岐阜新聞社の後藤栄司さんが、その魅力を考察します。



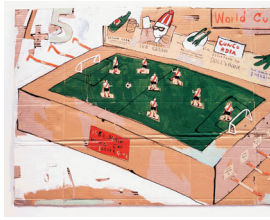
上：藝大デザイン科に在学中の1980年に制作された《WEDDING CAKE》。下：昨年、藝大の大学美術館で開催された『SDGs × ARTs展』では「十七の的の素には芸術がある」として、芸術とSDGsとの関わりを伝えた。

## 藝大

は、表現者たちの種が、大きく広がるための船。学生時代、「対決」をテーマにした作品制作の課題が出た時に、日比野はダンボールでウエディングケーキをつくり、その上で男女を対決させた。ナイーブな心と眼をもつ日比野が多くのおもちゃの仲間たちと触れ合い、そのなかで生まれた感情の表れなのだと思う。それから40年以上が経ち、芸術を学ぶ場のトップを務める学長として、今度は社会課題との新たな「対決」に挑もうとしている。今、「アートによって心は動く」「アートが社会を動かすことができる」と信じる日比野ほどの適任者はほかにいない。彼は芸術の必要性を社会に流布するとともに、社会課題への強い突破力を「<sup>キタ</sup>度」示してくれるだろう。日比野の「未来はバトンの渡し方一つで変わってくる。未来はバトンのもらい方一つで違ってくる」という発言は、教えや学びの重要性を示唆している。

\*今年4月に発表された日比野克彦学長のメッセージは「<sup>キタ</sup>度」と題されていた。





右：1982年のサッカーワールドカップでのアルゼンチン対ベルーの試合をモチーフにした《PRESENT SOCCER》。左：2005年に始まった「HIBINO CUP」。参加者はゴールやボールなどをつくる「アート」と「スポーツ」の両方で競い合う。

「ゴールを決める前からリズムが聞こえている。リズムが聞こえていなければゴールを決められない」と日比野は語っているが、アーティストがインスピレーションを受ける瞬間は、サッカー選手がゴールを決める瞬間と似ているのかもしれない。

ダンボールは、日比野克彦の代名詞。「自分がぶつかっていても、へこたれない素材なんです、ダンボールは」と言う彼は、誰でも簡単に入手できる素材で、エネルギーにチャージした作品を生み出し、80年代のアートシーンに革新的に登場する。だが、この時代の日本美術は、スピードが速く縦横無尽な日比野アートを捉え切れなかった。ダンボールの優しさ、軽さ、儂さ、無邪気さを武器に、時代の気持ちをつかんだ日比野は誰よりも先に走った。「絵を描くことは職業ではない方法である。考えを吐き出す時のメディアの一つである」と考える彼は、ダンボールを使った卓越した作品群のマチエールで、時代の心を動かした。



上：2013～15年にアーティストディレクターを務めた「六本木アートナイト」ではアートの多様性を広く発信。下：「明後日朝顔」(P6)の種が人と人、地域と地域をつなげていく「種は乗り物のようだ」と着想した「種は船」。

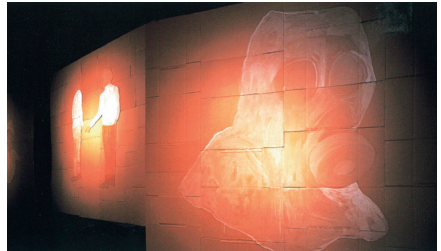
つていく。そして、日比野の想いは、あらゆる垣根を乗り越えて「芸術は人を愛する」という理念へと昇華していくのだ。

## サッカー

に対する日比野克彦の情熱は尋常ではない。1982

年に日本グラフィック展で大賞を獲った代表作《PRESENT AIRPLANE》《PRESENT SOCCER》にも、82年開催のW杯スペイン大会への憧憬が表現されている。その強い思いは、「HIBINO CUP」や日韓W杯公式ボスターの仕事につながり、日本サッカー協会社会貢献委員長の現在に至る。ボールとゴールさえあればどこでも誰でもできるサッカーで、世界の多様性と平等性を表現できると日比野は身体的に確信している。

上：スタジャンをダンボールでつくった1982年の作品《SWEATY JACKET》。下：1995年に行われた第46回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展では、「数寄の美学」をコンセプトにした展示でダンボールを支持体にした平面作品を発表した。



## 社会とアート

を結びつけることは、日比野の

ライフワーク。「美的感覚が一人ひとりと異なっていることが人間の個性の源になっている」と語る彼の美術活動の理想は、作品を通して社会とコミュニケーションすることで完成する。94年、平塚市美術館で開催された個展では、商店街とコラボし、住民にサポーターとして参加してもらう試みを行った。そのスタイルのちに「明後日朝顔プロジェクト」「種は船」「六本木アートナイト」「TURN」などのアートプロジェクトにつなが



# 保存科学

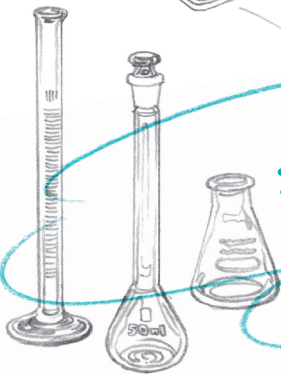
中央棟



でも、藝大ですし、これまでもレアな方ばかりに  
「次号は『藝大で見かける意外な人たち』です」  
つまりは、レアキャラを探せってことですか？  
「ネタ切れ」。しかし、有能な編集者Kさんは涼  
しい顔で思いもかけないテーマを繰り出します。  
通なら宿命とも呼べるアレに直面するわけです。  
10回目となりました。ここまで数を重ねると、普  
の森の奥深く、神秘の学び舎(?)で行われてい  
る藝大の授業に素人記者が潜入する当コーナーも  
おかげさまで『藝える』も発刊から11号。上野

## PART 1 「科学の力で 文化財を後世へ」

大学院美術研究科 保存科学研究室



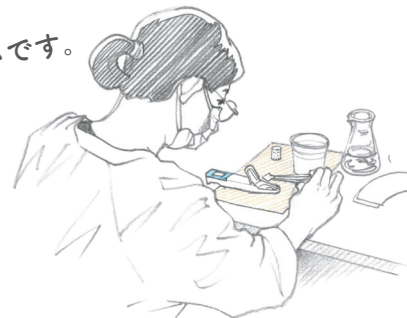
## 授業 SANKAN

白衣と制服と私  
大学院美術研究科 保存科学研究室  
+ 音楽学部附属音楽高等学校



ユニークな個性の学生たちが  
闊歩する藝大構内。その中に、さらなるレアな才能の  
持ち主たちが潜んでいることを、あなたはご存じですか？  
科学者も高校生も、芸術の道を歩む同志。多様さは、尊さです。

挿絵=小柳景義 文=大谷道子



お会いしてきた気も……と反駁しそ  
うになったところ、「まずは、白衣の  
学生さんたちに会いましょう」とK  
さん。聞けば、大学院美術研究科には、  
白衣を着て実験を行う学生たちがい  
るというではないですか。

ということ、春に訪れたのは美術学部中央棟  
の一角。集まった10名超の学生は女性多め、留学  
生と思われる方も複数。この一団が保存科学研  
究室を含む文化財保存学専攻の学生たちで、これか  
らガイダンス兼新年度最初の授業が行われる。

### 理系文系芸術系の混成チーム

絵画、彫刻、工芸品などのアート作品が完成し  
た瞬間から向き合わねばならないのが、「劣化」  
という時との戦いだ。形あるものは  
崩れ、色あるものは褪せ、金属は錆  
びて剥落し、木材は朽ちていく。そ  
こで、貴重な文化財を後世に残すた  
めに駆使される科学技術が保存科学。  
藝大では、劣化の様子を解析する「文  
化財測定学」と、保存や修復に使う  
素材を研究する「美術工芸材料学」の  
2つを柱に、文化財を保存する環境







未来創造継承センター長を兼任する桐野文良教授。青年期は「とにかく大きいものを動かしたくて」パイロットや建築家を夢見た人である。



「M1(修士1年)が全員集まるのは、この授業だけ。次に会うのは、再来年の修了の発表会です。でも、文化財の世界では、研究者同士の横のつながりが非常

のあり方や劣化の抑制策の検討が行われている。研究室名に「科学」がつく通り、ここは藝大のなかでは珍しい理系ジャンルの学問領域。その歴史は古く、藝大美術学部の前身である東京美術学校では創立間もない頃に工芸化学教室がつくられ、現在の研究室は1963(昭和38)年の大学院設置と同時に開かれた保存修復技術講座に端を発する。扱う文化財は古い時代のものでなく、現代アート作品だってもちろん対象である。授業開始時刻に登壇したのは、研究室を率いる桐野文良教授。白衣に身を包んで……はい、ない。学生たちも、今のところは皆、平服だ。

に大事になります。この貴重な機会をぜひ活かして、頑張ってください。」

コロナ対策のため3班に分かれ、さっそくのスタートである。まずは桐野教授の演習へ。教授の専門は文化財材料学のなかでも金属、無機の顔料の研究とのことで、講義では前置きもそこそこに、金属工芸における伝統技法の色揚げ(金メッキのような表面加工の手法)についての解説が始まった。江戸時代の小判の製造工程を示しながら、その表面に加圧することで、えーと、長さや厚さに生じる原子の歪みをX線回折法で検出して……すみませーん、待ってくださいー！

伸ばした手の先をただ見るしかない取材班に比べ、学生さんたちはまったく動じずに黒板と資料に集中。マイクロスコップやX線画像で詳細に明らかになる文化財の細部は、つくられた当時の人の手の動きやその痕跡が確かに感じられ、また違った熱や輝きを帯びて見えてくるから、不思議だ。隣の教室では、貴田啓子准教授のリードで、古い浮世絵の色の具合を観察し、pH(水素イオン指数)を測定するなどしてその劣化度を評価する実習が行われている。ここではじめて白衣の教授陣に出会い、歓喜に湧く我々。聞くところ、今日は座学中心のため着用者は少ないが、研究室では600種類もの薬品を

扱い、中には毒物、劇物も少なくないため、白衣は必須アイテムなのだという。

紙片を薬品に浸し、器具で数値を測り、そのプロセスひとつひとつを紙に記載していく……ほほう、これがノーベル賞学者も必ずつけるという理系名物・研究ノートというものか。申し遅れたが、この研究室には理系学部で応用化学などを学んだ学生のほか文系学部や藝大美術学部出身もいるた

人体の検査にも使われるX線装置で江戸時代の手鏡を透過観察。古の職人の手技、ときには失敗痕もあらわに。







白衣が板についた塚田教授（左）、貴田准教授は、ともに応用化学出身。兄・姉のように学生たちに接する。

め、化学実習の初歩の指導も併せて行われている。しかしまあ、異世界ですよ。講義の間に見せてもらった研究室内には大小種類もさまざまな電子顕微鏡や光を用いた分析装置、X線透過像撮影設備（病院のレントゲン室にある黄色に黒のハザードシンボルあり）、壁には懐かしの「水兵リーベ多くの船」の元素記号一覧表。さらに、物体の発する熱を分析する装置、混合した液体や気体を分離させ解析するクロマトグラフ分析装置……理系出身の学生さんをして「藝大にこんなにそろっているとは思わなかった」と言わしめるほどの装置が備えられているんですから。これらの安全な使

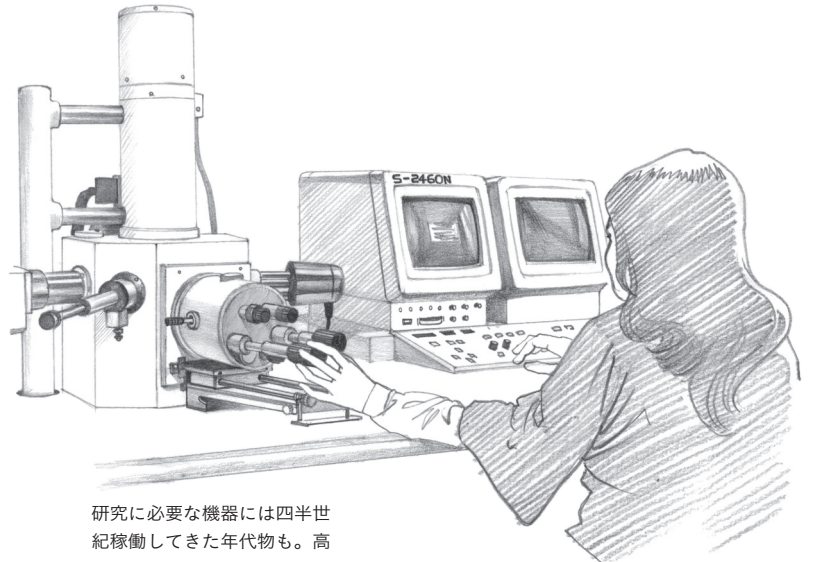
い方をマスターするのも、科学者の嗜みなのだ。さて、3つ目の講義が行われている通称「三角実験室」へ。部屋の形が三角だからというエビデンスに忠実な(?)名の部屋は、ビーカーやフラスコといった理化学器具をはじめ多種多様な実験装置が居並ぶザ・研究室。この日は、美術館で展示や収蔵に使われる接着剤から出るガスの、文化財に対する有害性のテストが行われていた。

### タイムマシンも完備？

慣れた手つきでビーカーを扱う理系出身学生がいれば、実験に使う角材を華麗な鋸さばきで切り出してみせる工芸出身の学生もいる。適材適所みんなちがってみんないい……と微笑ましく部屋を一巡しながら、ふと目が留まったのは、ある装置につけられた「寿命試験室」のサイン。寿命を試験？もしかして、この中では時間を早く進められるとか、そういうタイムマシンのな？

ドラえもんの読みすぎでした。正しくは、湿度や温度、光量を自動制御した環境下で経年変化を観察するための装置。先ほど用意した接着剤のサンプルもこの装置に入れて、普通よりも加速度的に劣化が進むなかでの耐久具合を観察する。有限の時間を、科学の力でグッと短縮するわけだ。

実験の前には、ディスプレイの時間も設け



研究に必要な機器には四半世紀稼働してきた年代物も。高価でそうそう買い替えてできないため取り扱いには慎重に。

られていた。今日の議題は、ヨーロッパで実際にあった絵画のヘンテコ修復騒動（キリストの顔が素人の手によってお猿さんのように塗り替えられたというやつですね）の是非。担当の塚田全彦教授は、「結論には至らなくても、話しながら考えることが大事。文化財をどう扱うか、それを決めていくのは、今学んでいる彼らですから」と意義





廣田さん(左)、平山さん(右)、アヤドさん。コロナ禍の時代に懸命に学んだ経験は、財産になるはず。

を語る。さまざまな視座からのものの見方に触れることが、見識を深めることにきつと役立つ。「驚きましたか? でも、これでも藝大……というか、これが藝大なんです」。研究室を一巡した我々にそう言ったのは、胸にX線フィルムバッジをつけたままの桐野教授だった。藝大に着任する前は大手総合電機メーカーで情報記録の材料研究に勤しんでいた、生粋の化学畑。しかし、もとも

とは歴史に興味を持ち、考古学か化学かを迷って化学を選択した方だ。巡り巡って考古学に寄与する研究職に就いたというなりゆきは、運命のいたずらか、それとも宿命と呼ぶべきか。

「高校時代、進路を考えたときに真っ先に対象外になったような大学に自分で来ちゃう、というね。まあ人生、そんなもんですよ(笑)。昔の保存科学は独立していて、他を寄せつけないところがありました。それが、それじゃ藝大に保存科学が存在する意味がない。理系も人文系も芸術系も、来る者は拒まずの融合領域を目指しています」

教授がオープンなら、学ぶ学生も実に多様多才。仏教系の大学の理工学部で物質化学を学び、大学が保有する文化財を対象にした分析化学を専攻していた平山実夢さんは、「やりたいことをやるか、就職活動を優先するかを考えたとき、私はやりたいことを追求したいと思って」藝大へやってきた。芸術大学での学びは「すごく楽しい。個人戦の色が強い理系と違い、研究室の雰囲気温かく、視野が広がる感じがします」と述べた。

エジプトから国費留学生で博士1年のアヤド・モハメッド・アブダッラー・エッサイド・ハサンさんも、繊維の退色や劣化を研究している考古学志向の化学者。母国で大エジプト博物館のプロジェクトに関わったことで藝大と縁がつながり来

日したが、「母国では専門家に任せる実験や分析を、ここでは自ら手がけられるのが新鮮」と手応えを語る。ちなみに博物館のオープンはコロナ禍とウクライナ危機のため延期中。力を発揮できる平穩の日が一日も早く訪れるといい。

藝大芸術学科で日本美術史を学んだ修士2年の廣田久美子さんは、鎌倉時代の仏像、とくに運慶の作品の造形に魅せられ、在学中から保存科学研究室に関心を寄せていたという。

「美術史的な見方もあれば、材料、物質としての観点もある。美術を異なる観点で見えていくことで、また違った面白さが学べるんじゃないか」と修士

でいったん研究生生活を離れるが、ナノセルロース(紙の繊維をクリーム状にしたもの。修復材としての活用が期待される)の研究には、長いスパンで取り組んでいく。

文化財が長い命を生きるように、研究者のたゆまぬ努力と連携もまた、川の流れるように。白衣をなびかせ美術学部を闊歩する異能の研究者たち、出会えたらあなたはラッキー、です。





## PART 2 「神童たちの 青春な日常」

音楽学部附属音楽高等学校



さてさて、編集Kさんから申し渡された次なるターゲットのヒントは「制服姿」。あ、これは私にもわかりますよ。藝高でしょ？ 正式

名称は、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校。厳しい選抜を経て全国から集った若き音楽の俊英たちの学び舎は、音楽学部隣接しており、学校帰りか、楽器のケースを携えたその姿を何度か目にすることがある。

でも、門をくぐるのはこれがお初です。正門から眺めた佇まいは、ごくごく一般的な高校の校舎。しかし、門のすぐ傍らにテニスコートがあったりして、なんとなく優雅な雰囲気も漂う。

「ようこそお越しくださいました」。このコーナーの取材ではなかなか聞けないエレガントな挨拶をしてくれたのは、副校長を務める平山多郎先生と教務の大平記子先生。まずは応接室にて、藝高の概要と授業カリキュラムなどについて教わった。

日本で唯一の国立音楽高校である藝高の創設は、藝大に遅れること5年の1954（昭和29）年。

東京藝術大学音楽学部  
附属音楽高等学校

## 藝高

「演奏研究」の授業中。隣に座るのは同じ専攻の生徒とは限らないため、対話から新鮮な発想が導き出されることも。



当初は御茶の水にあり、作曲、ピアノ、弦楽器、管打楽器の4専攻からスタートした。その後、邦

楽の募集など専攻の増減があり、現在は1学年40人定員の少数精鋭。多彩な専攻の生徒が、北は北海道から南は宮崎、さらに海外籍の生徒まで幅広く集っている。もちろん厳しい入学選抜を受けているわけで、つまりは音楽の神童たちの殿堂が、ここ藝高なのである。

「現在は全国各地に素晴らしい指導者の先生がた

くさんいらつしゃいます。それでもここで学ぶことの意義としては、やはり演奏レベルの高い生徒が集まるなかで、お互いに刺激を受けること。在学中にアンサンブル（合奏）をしたり、さまざまなコンクールや演奏会に参加したりするのも、演奏家として大事な経験になります」（大平先生）

おっと、耳に懐かしい授業開始のチャイム音が。さてさて藝高の授業、その実際とは？

### 大学レベルの対話型授業

藝高の授業を大きく分けると、国語数学理科社会その他の普通教科、そして、音楽高校ならではの音楽理論、声楽、器楽、作曲といった音楽の専



門教科の2カテゴリー。単位数の比重はほぼ1対1で、当然ながら普通科の高校とはかなり異なる。「教科の内容と数は文科省から割り当てられたとおりで、おそらくこの音楽高校でも同じかと。ただ、音楽科目の授業内容のひとつひとつが高校生としてはかなり高度で難しいものになっていると思います」とは、副校長・平山先生の弁。たとえば、必須科目の「音楽理論」は和声の学習が中心で、大学との連携による教育プログラムが組まれている。同じく必須科目でこれから見学する「演奏研究」は、演奏表現について多角的な観点から考え、導く力を育む授業。音楽理論での学習内容を基盤とし、楽曲への総合的な理解を深め演奏の実践力を高めるために設けられる授業だ。

案内されたのは、教室？ というか、これは立派なホールではないですか。前方のステージにはグランドピアノと楽器用の席と譜面台がセットされ、すでにヴァイオリンにヴィオラ、チェロとピアノの演奏者が鎮座している。演奏する生徒も、ステージを取り囲むように座る生徒たちも、40人の3年生ほとんどが白いシャツに濃紺のベストスカートとスラックス姿。おお、制服の藝高生たち！ 授業を



の3年生ほとんどが白いシャツに濃紺のベストスカートとスラックス姿。おお、制服の藝高生たち！ 授業を



作曲科出身で自らも藝高OGの平川先生(左上)。音楽系の授業やレッスンには、藝大の教授陣も登場することがある。

受け持つ平川加恵先生が我々一同を紹介すると、「こんにちは！」と快活な挨拶の音が。

「今日は、シューマンについての授業の最終回。ピアノカルテット(ピアノ四重奏曲・変ホ長調作品47)を取り上げます。今までシューマンの和声の研究し、歌曲の研究では言語というアプローチからも学びましたよね。それらの視点をフル活用して、これから取り上げる個所がどんな書法で書かれているかを、話し合いながら捉えてください」

第4楽章冒頭のドラマチックなユニゾン(複数の楽器が同じ旋律を弾くこと)を、まずは譜面で確認。その後、本日の演奏当番の生徒4人による実際の演奏を聴き、そこから見えてくる音楽的特徴について2、3人で組になってディスカッションし、意見を発表する。

「2拍子に聴こえました」  
「そう！ この冒頭1小節の威力たるや、ですよ





ね。○○さんはどう思った？」

「えっと、××ページの最後の小節の転調が……」

「そこだよね！ あ、何人が共感したね。そこで、  
どういうふうに技法が変わってるかな？」

「転調の仕方、それを使った推進力が、やっぱり  
シューマンらしいな」と

平川先生の快活なリードで解釈の議論の輪が広がる。当誌編集長のF教授は「(マイケル・)サンデル教授みたいだなあ。俺もやりたい」と感心しきり。理論の詳細は、素人の我々にはもちろんわからないほど高度だけれども、なんだか参加しているだけで曲の奥行きが見えてくる。そして何より、生徒たちの演奏は文句なく素晴らしい！！

「私の願いとしては、かしまった感じではなくなるべくフランクに……オーケストラや合奏の最中にする対話のような感じでやりたいですね。だから、机ではなく譜面台で、演奏の環境に近い雰囲気。隣に座ったいろんな楽器の専攻の子と対話するなかで、多様な視点に気づけるように」

今日日、演奏家にとっても知覚の言語化は避けられない訓練だと平川先生。演奏研究は2年生から履修するが、3年生ともなるとアンサンブルの経験数から解釈も多様で重層的になるといふ。

このほかに音楽理論、ソルフェージュ、室内楽や合唱といった実技の授業があり、前期後期には

歴史ほか社会科系科目担当の長谷川祐平先生は、自称「音楽オタクなもので」。藝高の先生の探究心、さすがです。



### 幼くとも、覚悟を持って

通常の期末テストに加えて演奏の実技試験が。さらには、学内外での演奏会への参加、オペラや音楽の鑑賞などの校外授業、コロナ禍でここ数年中止になっているが国内外への演奏研修旅行も行われ、厳しくも充実のカリキュラムが組まれている。

### 幼くとも、覚悟を持って

そして、音楽専攻の藝高生といえども高校生。

普通科の授業も、ちゃんとあります。ホールから校舎3階の教室に移動すると、1年生のクラスでは「歴史総合」の授業中。教室の設えは普通の学校と同じだけれど、教壇横にはグランドピアノ、そして五線譜の黒板が備え付けなところは、さすが藝高。

この日は、フランス革命について学習中。ふむふむ、皆さん、真面目に机に向かってますね。まあちょっとLINEの画面が見えたりするのは、お約束ですよ……ん？ 手

前の生徒さんが教科書の上で読んでいるのは……もしかして楽譜？ 授業中のいわゆる内職が、藝高生だと楽譜になるのだろうか。

と思いきや、これはあらかじめ先生から配られたものだった。フランス革命時、兵士た





ちの愛唱歌として

つくられ、のちに  
共和国の国歌とな

った「ラ・マルセ  
イエーズ」。実際

に音源も流され、  
その曲がやがてベ

ルリオーズやドビ  
ュッシーといった

作曲家に影響を与えたエピソードなどが披露され

るのは、音楽高校ならではの授業展開。ちなみに

担当の先生は音楽教諭ではなく、あくまで授業に

興味を持ってもらうための工夫なのだとか。

隣の2年生の教室では、「生物基礎」の授業中。

隣「無理」との声が上がるのも、幼さが残る素顔

が垣間みえて微笑ましい。そういう工作が得意な

お兄さんやお姉さん、向こうの美術学部になくさ

普通のティーンエイジャーで、ホツとする。

「『小学生か?』と思うような無邪気さと落ち着

いて大人びたところが同居しているのが、藝高生

の面白いところですね」と副校長の平山先生。大

人びた部分は、もちろん彼、彼女らの覚悟による

ものだろう。10代半ば、あるいはもっと早い時点

で音楽家として生きていくことを決意し、技術的

にもメンタル面でも、ときにはシビアな場面に直

面してきたはずだ。好きなことを極められるのは

喜びでもあるが、同時に、実力の壁と直面する厳

しさも避けられないもの。

「藝高に来るまでは、それぞれの地元で突出した

才能の持ち主だったと思いますが、ここにはそう

した生徒が集まってくる。そのなかで力を発揮し

てさらに自信をつける生徒もいれば、不安を感じ

る生徒もいると思います。それでも……」

平山先生が、あるエピソードを教えてくださいました。

以前、英国に研修旅行に行った際、そこで演奏を

披露する生徒は緊張で真っ青になり、体調も最悪

に。これでは無理だろうと思われるものの、いざ

本番となると生徒は堂々とステージに出て、にこ

やかに演奏を成し遂げた。こうした修羅場を、こ

の年齢になるまでにすでに何度もくぐってきた強

さもまた、彼らには備わっている。

9割以上が藝大音楽学部へ進み、その後も大学

院や海外留学へと、藝高生の道は広がっていく。  
同じ制服を着て上野の森に学んだ日々もまた、彼、  
彼女らの豊かな音の世界の礎になることだろう。  
いざ行かん、いざ行かん——教室に響いた革命歌  
の調べが、体育館の歓声に混じり、耳に蘇った。



学校や生活の相談にも乗ると  
いう副校長・平山先生(右上)。  
ちなみに、体育授業中のBGM  
は生徒たちの選曲で、ハチャ  
トゥリアン作曲の「剣の舞」  
ほかクラシック音楽多数。



# お知らせ

今後の催しや大学のさまざまな取り組みを紹介

## ◎日比野克彦がもっとわかる!

### 「日比野克彦を保存する」プロジェクト

藝大の未来創造継承センターでは、マンシヨンの建て替えにより失われることとなった日比野克彦のアトリエを保存するプロジェクトを実施中。作品だけでなく、画材や生活用品、さらには空間自体や人々の記憶までもを対象とすることで、アトリエの



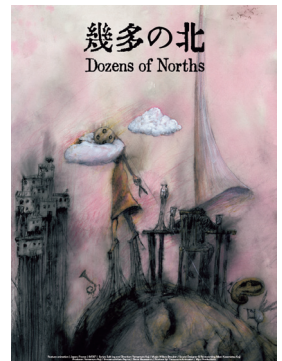
包括的な保存を目指しています。

来年1月にはクラウドファンディングの成果報告展を開催予定です。

## ◎山村浩二教授と修了生の和田淳さんがオタワ国際アニメーション映画祭でグランプリ受賞

9月に開かれた第46回オタワ国際アニメーション映画祭において、本学大学院映像研究科アニメーション専攻山村浩二教授が監督した『幾多の北』が長編部門で、同専攻修了生の和田淳さんが監督した『半島の鳥』が短編部門で、それぞれグランプリを受賞しました。

カナダで開催されるオタワ国際アニメーション映画祭は、アマシー、ザグレブ、広島と並ぶ世界4大アニメーションフェスティバルとして知



られています。

山村教授は、2007年に『カフカ田舎医者』で短編部門グランプリを受賞し、今回『幾多の北』で2度目の受賞となりました。2度のグランプリ受賞は日本人初、世界でもジャン・フランソワ・ラギオニ氏に次ぎ、史上2人目。同作品は同専攻修了生の矢野ほなみさんもアニメーターとして参加しています。なお、短編部門グランプリはその矢野さん

の監督作『骨噛み』（監督・プロデューサーは山村教授）に続き、2年連続で本学の修了生が受賞しています。『半島の鳥』は第72回ベルリン国際映画祭の短編部門スペシャルメンション（特別表彰）も受賞。音響監督は本学大学院音楽研究科修了生の滝野ますみさん、音楽は同科修了生の足立美緒さんが担当しました。

## ◎それはあなたの世界 『Met'y'averse』展



7月に空間のリニューアルをした藝大アートプラザでは、11月5〜27日（前期）、12月3〜25日（後期）に企画展『Met'y'averse』メチャバ

ース、それはあなたの世界〜』を開催します。参加アーティストは総勢34人。それぞれがつくり出す、まったく異なる世界を紹介します。

また、1月7〜22日には『壁〜inside outside〜』展を開催予定です。入場は無料。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

<https://artplaza.geldai.ac.jp/>

### ◎ ゴルドーニ&ベートーヴェン

#### 藝大出版会の新刊

藝大出版会では新刊2点を刊行しました。『啓蒙期イタリアの演劇改革―ゴルドーニの場合』(大崎さやの著)は、イタリアの劇作家カルロ・ゴルドーニの作品への批評を中心に演劇改革の意義を問う、イタリア演劇・文学研究者待望の研究書です。『つながれ! ベートーヴェン』コナナ禍に向き合いながら駆け抜けた、藝大・ベートーヴェン生誕250年記念イヤーの記録(東京藝術大学演奏芸術センター編)は、本学にゆかりのある執筆陣がベートーヴェンにまつわるコラムやエッセイを寄

稿。オンライン講座のダイジェストや演奏会レポートなど、盛りだくさんの一冊です。

藝大出版会の書籍は、藝大アートプラザでも販売中。最新情報は公式Twitter (@GeldaiPress) をご覧ください。



『啓蒙期イタリアの演劇改革―ゴルドーニの場合』  
4070円



『つながれ! ベートーヴェン』  
コナナ禍に向き合いながら駆け抜けた、藝大・ベートーヴェン生誕250年記念イヤーの記録』  
2000円

## 大学美術館(上野)の 展覧会

### ◎ 本館

東京藝術大学大学院美術研究科  
博士審査展  
12月9〜18日

※陳列館でも展示

工藤晴也 退任記念展

【OPUS MUSIUM】

十壁面教員22人展

2023年1月5〜18日

東京藝術大学卒業・修了作品展

1月28日〜2月2日

※陳列館・正木記念館でも開催

藝大コレクション展2023

3月31日〜5月7日

### ◎ 陳列館

赤沼潔退任記念展 ― Rebirth ―

11月3〜13日

第7回 東京都特別支援学校

アートプロジェクト展

2023年1月5〜15日

アートプロデュース専攻企画展(仮)  
3〜4月(未定)



藝大コレクション展2023で公開予定の  
横山大観『村重観猿翁』  
明治26(1893)年 東京藝術大学蔵

### 奏楽堂(上野)の演奏会

藝大フィル合唱・定期第413回  
『メサイア』

11月10日



- 18時30分  
3000円  
澤和樹第10代 東京藝術大学長  
退任記念公演  
11月12日  
14時  
9000円  
モーニング・コンサート 第10回  
11月17日  
11時  
15000円  
ウィンドオケ定期 第94回  
11月20日  
14時  
一般16000円  
高校生以下5000円  
邦楽定期 第88回  
11月21日  
17時  
21000円  
シンフォニーオケ定期 第66回  
11月24日  
19時  
一般16000円  
高校生以下5000円  
藝大プロジェクト2022

- 「藝大百鬼夜行」第2回  
11月27日  
15時  
4000円  
クセナキス〜音の建築家〜  
vol.2



奏楽堂

- 12月4日  
15時  
3000円  
藝大プロジェクト2022  
「藝大百鬼夜行」第3回  
12月10日

- 15時  
4000円  
藝大室内楽定期 第47回  
2月4日・5日  
各日14時  
1600円  
モーニング・コンサート 第11回  
2月9日  
11時  
1500円  
モーニング・コンサート 第12回  
2月16日  
11時  
1500円  
藝大チェンバーオケ定期 第40回  
2月19日  
15時  
1600円  
モーニング・コンサート 第13回  
3月16日  
11時  
1500円  
永井和子 退任記念演奏会  
3月21日  
時間未定  
無料

要事前申し込み

第16回 奏楽堂企画学内公募演奏会

3月31日

時間未定

無料

要事前申し込み

\*全ての公演で全席指定、当日券発売なし

\*展覧会・演奏会の名称、会期・日時などが変更になる場合があります。最新情報は、東京藝術大学公式ウェブサイト(<https://www.getatac.jp>)をご覧ください。

\*展覧会についてのお問い合わせ  
東京藝術大学美術館

☎0501554118600  
(ハローダイヤル)

\*演奏会についてのお問い合わせ  
東京藝術大学演奏芸術センター

☎05015525123000

\*演奏会チケットの取り扱い  
ヴォートル・チケットセンター

☎0315355112800  
チケットぴあ

<https://tpia.jp/>

東京文化会館チケットサービス

☎03156685106500

イープラス

<https://eplus.jp/>

藝大アートプラザ(店頭販売のみ)

☎0501552512102

## ○藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金(藝大基金)へ温かいご支援を賜り、深謝申し上げます。本号では、2022年2月から9月までに寄附をいただいた皆様のご芳名を掲載させていただきます(掲載をご承諾された方のみ)。

### [個人の皆様]

宗次徳二様 3300万円

戸谷克昌様 100万円

川村喜久様 56万 8260円

佐藤隆幸様 36万 5000円

安藤正夫様 30万円

山下良則様 20万円

磯崎拓也様 10万円

野見山晁治様 10万円

秋葉弘実様 8万円

小池高之様 5万円

玉置雄三様 3万円

原田一正様 3万円

藤本昌志様・祐三子様 3万円

田所厚一郎様 2万円

磯貝紀枝様 1万円

今井菜々美様 1万円

色本善信様 1万円

上田武夫様 1万円

上原昇様 1万円

國司有香様 1万円

久保田千曲様 1万円

坂本亜希子様 1万円

佐藤好邦様 1万円

鈴木敦子様 1万円

席屋正様 1万円

中出睦様 1万円

福田典子様 1万円

細谷和夫様 1万円

村上徳子様 1万円

門田伸一様 1万円

秋山境様 5000円

青柳美智代様

石井洋様

石樽宏成様

井出久實子様

井上朋子様

井上正英様

宇佐美敏男様

遠藤義明様

大川聡様

小出裕美様

小橋哲郎様

小林裕之様

澤田及子様

鈴木伸吾様

高橋和美様

富井絵美子様

友成進様・邦子様

鳥山静子様

長浦武史様

早川圭子様

廣瀬俊廣様

船橋晴雄様

堀野ミノリ様

堀之内優子様

三好克美様

村島葉子様

弓場啓司様

弓場多恵子様

吉田守様・多美子様

### [法人の皆様]

株式会社 CyberZ 様 50万円

アプロス株式会社様 30万円

天狗会様 10万 3200円

大興商事株式会社様 5万円

平成 30 年度東京藝術大学音楽学部声楽科謝恩会様  
1万 7714円

一般社団法人長唄東音会女子部様 5000円

若手女子東音会様 5000円

アンカー・シップ・パートナーズ株式会社様

株式会社 IKI 様

株式会社 OEN 様

一般社団法人はがきの名文コンクール実行委員会様

フォレスト上野ヴィラ様

ベルナルドジャパン株式会社様

株式会社 ミロク情報サービス様

山田産業株式会社様

## ○藝大基金のお願い

「藝大基金」は、東京藝術大学の長期的・安定的な財政基盤として、教育研究活動や社会連携活動の一層の発展と、我が国における芸術文化の振興などに資することを目的に設立されました。各種プロジェクトなどの実施と、学生へのさらに充実した支援体制を築くため、広く地域社会や企業などの皆様からご寄附を募っております。藝大基金の趣旨にご理解をいただき、ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



藝大生に緊急の支援を。若手芸術家に活躍の場を。

### 「若手芸術家支援基金」

東京藝術大学基金へのご寄附は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、展覧会や音楽会の中止などで影響を受けている在学生および本学出身の若手芸術家を支援する「若手芸術家支援基金」の原資となります。そして「若手芸術家支援基金」では、在学生への修学支援、学生などが開催する展覧会・演奏会への助成といった応援プロジェクトを実施しています。

### ☎お問い合わせ

社会連携課渉外企画係 ☎ 050-5525-2400 藝大基金ウェブサイト <https://fund.geidai.ac.jp/>